

シンポジウム⑤

穴性問題

みどころ

中医鍼灸では、配穴において穴性（あるいは穴位効能：漢方薬の薬味が有する薬性に類似した、経穴刺激で発揮するあるいは、期待できる主治作用）はごく常識的に取り扱われているものと考えられる。しかし、中国においても穴性に関する問題は確立されて居らず、議論が継続されている。そこで、当シンポジウムにおいて、穴性に関する問題を俎上において議論することを企画した。

まず、会員等を対象としたアンケート調査によって、穴性に関する認識や考え方、利用頻度等、具体的な運用の実態について調査した内容を瀬尾港二先生（アキュサリュート高輪院長）に「穴性アンケート調査報告」と題して紹介頂く予定である。日本の臨床家の穴性に関する意識調査についても織り込まれた内容であり、その実態に注目したいところである。

次に、中医臨床編集長である井ノ上匠氏（東洋学術出版社社長）より、「穴性をめぐる中国の動向」と題して、穴性問題に関する概略を解説頂く予定である。井ノ上氏は中医臨床誌上において穴性に関する企画も組まれており、本問題に関して非常に詳細な分析もされている。また、臨床家とは違った視点でこの問題について意見を頂くことは、シンポジウムにいても非常に楽しみな視点であると考えた次第である。

3人目のシンポジストは、金子朝彦先生（さくら堂治療院院長）で、「穴性についての考察」と題して、私論を展開頂く予定である。金子先生は中医臨床誌上において独自の穴性論も展開されており、新たな一步を開く内容であると思われる。

シンポジウムは、9月14日（日）の午前9：20-10：30までの70分と短い時間ではあるが、興味の尽きない話題と問題点を包含したシンポジウムになると思われる。なお、指定発言として、東北大学の関隆志先生、愛媛中医研の越智富夫先生、東洋学術出版社の山本勝司顧問にもご意見を頂く予定である。

今回のシンポジウムで結論が出せる様な浅薄な内容ではないが、今後の学会としての研究の方向性を示すことができれば幸いである。

中国における穴性をめぐる動向

井ノ上匠

(有) 東洋学術出版社

鍼灸の弁証論治は、「理・法・方・穴・術」の一貫性をもった治療システムだといわれる。そのなかで穴性は、弁証結果を治療に結びつけるうえで極めて重要な要素となる。なぜなら、鍼灸治療においてツボの効能を把握しておかなければ治法に対応した治療が成り立たないからだ。穴性概念の誕生によって、鍼灸の弁証論治システムは整合性のあるものになったのである。

しかし、穴性を生み出した中国では、穴性を記す書籍は数多く発行されているものの、その内容は一定しておらず、未だに統一教材には穴性が明記されていない。そのうえ、90年代以降、穴性に対して否定的な見解を述べた論文が散見されるようになつた。これはいったいどうしたことであろうか。そもそも穴性とは何なのだろうか。

そこで今回、①穴性の定義、②中国における穴性の歴史、③中国で繰りひろげられる穴性論争の3つについて紹介する。

【穴性の定義】1996年に発行された『実用鍼灸学詞典』(高忻洙主編)には、「穴性」の項目があり「穴に具わる性能。意義は薬性と同じ。主に穴性はツボ自体に具わる主治作用を根拠にする。ただしツボの主治には双方向性の特徴が具わっているので、穴性は相対的なものにすぎない。穴性を掌握すれば隨症取穴する際の根拠となる」と、説明している。

【中国における穴性の歴史】穴性は、1934年(民国時代)に羅兆堯(1895~1945)によってはじめて提起された。彼は「薬性と穴性、その意義は一つである」と述べ、中医の薬性をモデルにして穴性を提起した。新中国成立後(1949年以降)には『針灸学(二) 膻穴学』(上海中医学院・1962年)を皮切りに、特に1980年以降、穴性を記載した教材が急増する。

【中国で繰りひろげられる穴性論争】80年代から、雑誌文献において穴性の特徴や意義を概説した論文が散見されるようになるが、90年前後から穴性に否定的な見解があらわれるようになる。また2000年以降は穴性否定論に対する反論も試みられる。争点は、薬能モデルを用いてツボの効能を規定することの是非である。

つまるところ穴性論争とは、ツボの効能をどう表現するかという問題である。ツボの効能を把握することは、教育上でも臨床上でも有益であることは論を俟たないが、日本の臨床にあったツボの効能をどう集約し表記していくべきなのか、今後の活発な研究・討論に期待したい。